

## 『サムラー氏の惑星』 試論

森 哲 夫

『サムラー氏の惑星』(*Mr. Sammler's Planet*)は、アメリカの現代ユダヤ系作家ソウル・ベロウ(Saul Bellow 1915-)が1970年に公にした、1964年の『ハーゾグ』(*Herzog*)以来の長篇である。『ハーゾグ』が一般読者にも批評家にも極めて華々しく迎えられたのに対し、この『サムラー氏の惑星』は極く控え目な歓迎を受けたに止まり、なかには失敗作と断定する批評も見うけられた。例えば、ベロウについてのすぐれた小冊子を書いているイギリスの若手批評家トニー・タナー(Tony Tanner)も、その現代アメリカ文学論のなかで、この作品がこれまでの作品から「ほとんど進歩していない」(*Scarcely represents an advance in Bellow's work*)<sup>1)</sup>と極めつけている。ダヴィド・ギャロウエイ(David Galloway)もそのような意見であり<sup>2)</sup>、また、ベウロについての研究書があるジョン・クレイトン(John Clayton)も絶望的な見解を述べているようである<sup>3)</sup>。『サムラー氏の惑星』に対するこれら否定的な意見は、ひとつには一人の老人のともすれば保守的とみられないとも限らない眼——作者は老獺にも片眼にしていまっているのであるが——でニューヨークを観察させていることに対する反発というよりは、むしろこの作品の主人公サムラーが前作——彼ら批評家が絶賛を惜しまなかった——のハーゾグに余りにも似ていて、謂わば「25歳齢を重ねたハーゾグ」<sup>4)</sup>にすぎないのではないかという一つの大きな当惑から出てきているように思われる。

『サムラー氏の惑星』は、朝ニューヨークのウエスト・サイドにある寝室で

目覚めたアルトゥール・サムラー氏 (Mr. Arture Sammler) が目の前にある書物や論文が「変だな」(wrong)<sup>5)</sup> とふと感じる情景からその物語が始まるのであるが、ここで逸早くわれわれが気付くのは、このサムラーがペロウの小説ではすでにお馴染みの主人公だということである。謂ゆる疎外された(displaced)人間であって、それは『宙ぶらりんの男』(*Dangling Man*)のジョセフ(Joseph)であり、『機会を逃すな』(*Seize the Day*)のウィルヘルム(Wilhelm)であり、ハーゾグなのである。ただ違う点は、このサムラーがペロウの小説の主人公としては初めてヨーロッパ生れであり、ヨーロッパの伝統のなかで人間形成をしてきたということである。ポーランドのクラコウで生れ、イギリスに魅せられて「イギリス人」として20年間もロンドンで生活をし、「オックスフォード大学の社交室に相応しい表情」(expressions suited to an Oxford common room)<sup>6)</sup>が身につき、「大英博物館で読書している人の顔」(the face of a British Museum reader)<sup>7)</sup>になっているサムラーは、このニューヨークでは「二重に異国人であり、ポーランド・オックスフォード出身者」(Doubly foreign, Polish-Oxonian)<sup>8)</sup>であった。それ故、アメリカ人であるがために、このアメリカとの違和感に終始悩まされなければならなかったハーゾグとは異なり、サムラーはこの渾沌としたアメリカの現実に呑み込まれてしまって自己を見失うということは決してなく、距離をおいて眺めることができるのである。これは拘摸の現場をサムラーが目撃する場面によくあらわれているであろう。いつも利用しているバスのなかで立派な身装をしている黒人が拘摸をしているところを、サムラーはドキドキしながらもそれを一部始終、的確に視察しているのである。登場人物の一人は次のようにサムラーに言う。

In some ways, you're aloof too. Sort of distance from life. But you put up with people's shenanigans and *shtick*. It's just your old fashioned Polish politeness.<sup>9)</sup> (いろんな意味で、超然ともしていらっしゃいます。人生から多少距離をおいて。しかし人々のごまかしや愚行を寛大に眺めていらっしゃいます。それはまさに古風なポーランド的礼儀正しさです。)

しかし「古風なポーランド的礼儀正しさ」という裁断は余りにも皮相的で、サムラーが過去に体験してきた異常なまでに苛酷な半生を無視することになる

う。そしてその異常な体験を境にして、サムラーの生涯を便宜的に二つ、例えば「かつてのサムラー」と「いまのサムラー」というように分けてみる事が出来る<sup>10)</sup>。この「かつてのサムラー」にはハーゾグとの並行関係が多くみられるが、それを指摘していく前に、極く大ざっぱに彼の半生を眺めてみたい。

ショーペンハウワーに因んでアルトゥールと名付けられたサムラーはポーランドのクラコウ生れのユダヤ人で、長じてワルシャワの新聞の特派員として少年の頃からの憧れの地イギリスに渡り、グレイト・ラッセル通りに住んでメイナード・ケインズやリットン・ストレッチャー、特に H. G. ウェルズと親しく交わって20年代と30年代を妻と一人娘のシューラと共に幸福に暮らす。暗雲のポーランドに戻ってドイツ軍の侵略に逢い、シューラはカトリック女子修道院に匿われるが、サムラーと妻のアントニーナは強制収容所に入れられる。そこで彼はドイツ兵に銃の台尻で殴られて片眼をほとんど失明し、あげくの果て、7, 80人一緒に丸裸で自らの墓穴を掘らされたあとで一斉射撃を浴せられてしまう。しかしラザロのように彼だけ「あとになって幾つもの屍体の重圧から、もがいて出て、柔らかい土から這い出して」(Struggling out much later from the weight of corpses, crawling out of the loose soil)<sup>11)</sup> 森のなかに逃げ込み、バルチザンに身を投じる。そして武器を捨て無抵抗で命乞いをするドイツの落伍兵を一人、至近距離から射殺したりもした。ポーランドの解放が決定的になると、今度は急に雲行きが変わって「ユダヤ人抜きのポーランド」が叫ばれて、サムラーはかつての同志に銃火を浴せられる羽目になるが、運よく彼はそれをくぐり抜けて、大きな墓所に身を隠して、シェスラキュヴィチというポーランド人の墓守りの世話になって難を逃れることができた。4ヶ月ほどそこで過しているうちに戦争も終り、彼は難民収容所に収容されて、そこで娘のシューラと再会することができた。今度はまさにキリストの復活であった。このような異常な体験が、「世界国家のためのコスモポリス計画にジェラルド・ハードやオラフ・スティプレドンと共に加えられ」(Included with Gerald Heard and Olaf Stapledon in the *Cosmopolis* project for a World State)<sup>12)</sup> 「進歩のニュース」

(*News of Progress*) や「世界市民」(*The World Citizen*) の寄稿者でもあったサムラーを大きく変えてしまったことは当然のことであった。サムラーは次のように告白する。

I suspect my own judgments because my lot has been extreme. I was a studious young person, not meant for action. Suddenly, it was all action—blood, guns, graves, famine. Very hard surgery.<sup>13)</sup> (私は自分自身の判断に自信がない。それというのも私の運命が余りにも片寄ったものだからだ。私は学問好きの若者で、生れつき行動には不向きだった。突然、一切が行動になってしまった——流血、銃、墓、飢饉。とても苛酷な外科手術でした。)

この小説が始まるころでは、彼即ち「いまのサムラー」は、娘とともにニューヨークにすでに20年以上も住みついていて、甥のエリヤ・グルーナー(*Elya Gruner*) という産婦人科医の世話になっている。サムラーより6、7才年下の彼が、二人を難民収容所から文字通り救い出してくれて、生活の面倒を完全に見てくれている。お蔭で70歳を越した老サムラーは、アポロ宇宙船が月を目指して飛び続けている1969年の今、マイスター・エックハルトを読んだり、現代の風俗や人間を観察したり、要約したり、更に自分の周囲に集まってくる人々の相談相手、というよりは聞き手になって悠々自適の毎日をおくっていられるのである。

その恩人グルーナー医師が動脈瘤の手術を受けて入院している。この小説の第1日目にサムラーは病院に見舞いに行くが、3日目に彼は死ぬ。そして『サムラー氏の惑星』はこの3日間にその313ページを使っているのである。『ハーゾグ』は341ページをハーゾグの5日間に費して、この点二つの小説は非常に良く似ているのである。更に良く似ているのは「かつてのサムラー」とハーゾグで、これは例挙するときりがないほどであるが、これからその主たるところを並べてみることにしたい。

「如何に力をふりしぼって子供たちを甘やかしたか。自分を甘やかした」(*how she found the strength to spoil her children. She certainly spoiled me<sup>14)</sup>*) とハーゾグが思い合す母がいたが、サムラーにも一人息子を甘やかす母がいた。「咳が出るときには、口を召使いの手でおおった。自分の手に微菌がつくと

いけないからであった。」(he had covered his mouth, when he coughed, with the servant's hand, to avoid getting germs on his own hand.)<sup>15)</sup> その頃のサムラーは母と共に「変人で苛だち易いという評判」(a reputation for eccentricity, irritability)<sup>16)</sup> でどちらかというと傲慢であった。16歳の誕生日に母が贈ってくれた本がショーペンハウワーの『意志と表象としての世界』であったが、まさにその同じ本を、まさに同じ年齢の時にハーゾグは愛読していたのである。更にこの二人に共通することとして未完の著作がある。ハーゾグはロマンチズムに関する論考を書きあげる筈であったが、それは「今だに焦点が定まらない800ページの渾沌たる論考」(eight hundred pages of chaotic argument which had never found its focus)<sup>17)</sup> でしかなく、一方サムラーのは、自から親しく話し合った H. G. ウェルズの回想記をものにするつもりであったが、1939年に帰国した丁度その時侵略が始まってポーランドはさながら爆発し、そのメモは「1, 2 マイル中天に噴き上げた蒸気の中に巻き込まれて」(in the geyser that rose a mile or two into the skies)<sup>18)</sup> 無に帰してしまった。「ついに発表されたら、誰れもがびっくりするだろう」(when finally published they would astonish everybody)<sup>19)</sup> というシューラの期待にもかかわらず、その回想記は決してかかれることはないであろう。戦争中の体験が、サムラーから「世界市民」やユートピア、更には H. G. ウェルズに対する関心をすっかり奪い取ってしまっていたからである。その他この二人に並行することはまだまだあるが、例えばサムラーのポーランドで殴られて片眼を失うという災難に対し、ハーゾグもポーランドに旅行して不名誉な病気をもらうという災難——このようなことにまでこの二人の並行関係をみていくことができるであろう。以上のような様々の並行関係から、「かつてのサムラー」はまさにハーゾグであり、ハーゾグのパロディであると断言できるのである。

『ハーゾグ』の第1ページで、ハーゾグについて次のような文章が出てくる。「田舎にかくれ住んで、彼は新聞社、公職にある人々、友人や親類、そしてあげくの果ては死者にまで狂人さながらに、無数の手紙を書き続けた。」(Hidden

in the country, he wrote endlessly, fanatically, to the newspapers, to people in public life, to friends and relatives and at last to the dead.)<sup>20)</sup> それというのもハーゾグは半年前から「説明し、決着をつけ、正当化し、展望を与え、明確にし、償う必要」(the need to explain, to have it out, to justify, to put in perspective, to clarify, to make amends)<sup>21)</sup> に駆り立てられていたからであった。このようにハーゾグは「説明すること」に囚われていたのであるが、一方のサムラーは、やはり最初のページでまさにハーゾグのパロディとして次のようなことを考えるのである。

You had to be a crank to insist on being right. Being right was largely a matter of explanations. Intellectual man had become an explaining creature. Fathers to children, wives to husbands, lecturers to listeners, experts to laymen, colleagues to colleagues, doctors to patients, man to his own soul, explained.<sup>22)</sup> (変人にでもならなければ正しいなんてことを主張できるものではない。正しいということは主に説明の問題なのだ。知識人は説明族になりさがっている。父は子に、妻は夫に、講演者は聴衆に、専門家は素人に、同僚は同僚に、医師は患者に、人は己れの魂に、それぞれ説明するのだ。)

サムラーにとって何よりも大切なことは、「人間は識別力を身につけなければならぬ」(one has to learn to distinguish)<sup>23)</sup> ということなのである。「識別し、識別し、識別せよ。大切なのは識別することであって、説明することではない。」(To distinguish and distinguish and distinguish. It was distinguishing, not explanation, that mattered.)<sup>24)</sup>

「論証だの、説明だのという奴は！」(Arguments! Explanations!)<sup>25)</sup> とサムラーは腹立たしく考える。「全ての者があらゆる事を全ての人に説明しようとする。あげくの果て、新たな、共通の解釈が用意される。この解釈にしても、一世紀ばかりのあいだ人間がお互に言ってきたことの遺産であって、以前と同じ運命を辿って、虚構になってしまおうだろう。」(All explain everything to all, until the next, the new common version is ready. This version, a residue of what people for a century or so say to one another, will be, like the old, a fiction.)<sup>26)</sup> お蔭で「人類の精神生活は收拾のつかないものになっている。」(This makes the mental life of mankind ungovernable.)<sup>27)</sup>

サムラーを取り巻く人間は、皮肉なことにほとんど収拾のつかない者たちなのである。イイディッシュ語で *sammlen* は「集める」(to collect) の意味である。<sup>28)</sup> その名が示す如くサムラーは様々な経験や印象、それに社会風俗、例えば暴力行為、マフィア、スワッピング、乱交、トイレ化した電話ボックス等を集めて足早に歩く。イギリス人風に巻いた蝙蝠傘を手にして。もっともベロウ自身は皮肉な調子で次のように述べている。「サムラー氏のなかのエピソードは、ニューヨークの中産階級の狂気の典型のつもりですが、多分、私は少しばかり時代おくれになっていることでしょう。」(The episodes in Mr. Sammler are meant to be typical of the madness in New York City middle-class life. But I may be a little behind.)<sup>29)</sup>

そしてサムラーの蒐集を完全にすべく、「ブルックが告白に押しかけてこなければ、マーゴットがこなければ、フェファーが乱脈なベッドルーム冒険談をしにやってこなければ、アンゼラが打ち明け話にやってきた」(If it wasn't Bruch forcing his way in with confessions, if it wasn't Margotte..., if it wasn't Feffer with his indiscriminate bedroom adventures, it was Angela who came to confide.)<sup>30)</sup> という具合で、このなかにグルーナー医師と息子のウォレス、アイゼンそれにラル博士の名前が更に加わるのである。サムラーはまさに「ニューヨークの常軌を逸した連中の腹心の友であり、間違いじみた男たちの司祭、間違いじみた女たちの先輩であり、狂気の記録係でもある。」(confidant of New York eccentrics; curate of wild men and progenitor of a wild woman; registrar of madness.)<sup>31)</sup> 「サムラー司祭」のところによく押しかけてくるウォルター・ブルック、60歳になる立派な音楽家であり音楽評論家でもあるが、「女の腕に恋い焦れる」(Bruch fell in love with women's arms)<sup>32)</sup> ところがある。現在はドラッグストアのレジの腕に参っていて、その不毛で異常な愛の一部始終——彼女の腕に自分の身体を何気なく押しつけてクライマックスに達して射精する——を辟易して逃げ腰のサムラーに「告解」しないではどうしてもいられない。彼は又、ブルックが音楽評論家たちに猛烈に喰ってかかっている手紙を読まされて次のように感じる。「ここにもまた、論争好きで滑稽な面が表われて

いる。泥にたっぷりはまり込み、自意識過剰になり、演技をやりたがる道化者的なブルックがいる。」(this again was the cotentions, ludicrous side of things, the thick-smearred, self-conscious, performing loutish Bruch.)<sup>33)</sup> あのハーゾグもまたそこに居たのであった。

かつては小宇宙として人間は、神が創造した大宇宙の一部であり、神は人間と事物に存在と意味とを与え、従って神において真理と存在とが一致していたのである。その神を喪失した現代人は、自から神になり、本来有限の存在だったものが無限の存在だと主張するようになってきているのである。サムラーは気がついてた。

The labor of Puritanism now was ending. The dark satanic mills changing into light satanic mills. The reprobates converted into children of joy, the sexual ways of the seraglio and of the Congo bush adopted by the emancipated masses of New York, Amsterdam, London. Old Sammler with his screwy visions! He saw the increasing triumph of Enlightenment—Liberty, Fraternity, Equality, Adultery! Enlightenment, universal education, universal suffrage, the rights of the majority acknowledged by all governments, the rights of women, the rights of children, the rights of criminals, the unity of different races affirmed, Social Security, public health, the dignity of the person, the right to justice—the struggles of three revolutionary centuries being won while the feudal bonds of Church and Family weakened and the privileges of aristocracy (without any duties) spread wide, democratized, especially the libidinous privileges, the right to be uninhibited, spontaneous, urinating, defecating, belching, coupling in all positions, tripling, quadrupling, polymorphous, noble in being natural, primitive, combining the leisure and luxurious inventiveness of Versailles with the hibiscus—covered erotic ease of Samoa. Dark romanticism now took hold.<sup>34)</sup> (ピュリタニズムの努力は終ろうとしている。暗い悪魔の工場は明るい悪魔の工場に変っている。神に見放された人々は歓喜の子供に変身し、ハレムとコンゴの叢林地の性的習慣をニューヨークやアムステルダム、ロンドンの解放された大衆が採用している。老サムラーには気違いじみた情景が眼にみえることか! 彼には啓蒙運動が着々と勝利を収めているのが分った。——自由、友愛、平等、姦通! 啓蒙、普通教育、普通選挙権、多数者の権利に対する全ての政府の承認、女性の権利、子供の権利、犯罪者の権利、異民族間の結婚の認可、社会保障、公衆衛生、個人の尊



敵、正義への権利、——革命的なる世紀が勝利を得、逆に教会と家庭の封建的な束縛は弱体化し、貴族の特権（義務を伴わない）は、ことに性欲上の特権は広く行きわたり民主化されていて、禁制に制約されず、自由に振舞い、小便をし、糞をたれ、げっぷをし、あらゆる体位で、二人で、三人で、四人で多種多様なかたちで性交する権利を行使し、自然であり、原始であり、ベルサイユの余暇と贅沢な工夫とサモアのハイビスカスにおおわれた性愛とを結び合わせるのが貴族的なのである。現代は暗いロマンスイズムの支配下にあるのだ。）

人間は解放され、自由になり、個人となったが、その結果はどうなっているのだろうか。サムラーは「これらの新たな個人が、新しい余暇と自由を享受していながら悩んでいるのを見て」(to see how much these new individuals suffer, with their new leisure and liberty)<sup>35)</sup> 当惑させられるのである。

Hearts that get no real wage, souls that find no nourishment. Falsehoods, unlimited. Desire, unlimited. Possibility, unlimited. Impossible demands upon complex realities, unlimited.<sup>36)</sup> (心は真の報いを得られず、魂は糧を得られず。虚偽は無制限。欲望も無制限。可能性も無制限。複雑な現実に対する無理な要求も無制限。)

サムラーを取り巻く男女が欲求不満に追いたてられ、「独創性の熱病」(a fever of originality)<sup>37)</sup> にかかっているにも無理もないことである。彼らはキルケゴールが言うような自己と有限との関係を樹立し、有限の中で完全な安らぎを得、有限なものや、普通のものしか必要としない人間ではなく、逆にこの世の中の異常なものを探し求め、自分たちが他人から啞然と見とれられるような存在になれることにあこがれ、精一杯、狂気じみた芝居に自からを駆り立ててやまない「滑稽な人種」(the ridiculous bleeds of men)<sup>38)</sup> なのである。例のブルックに、その常軌を逸した行動もクラフト・エービング症例の一つにすぎないと慰めてやって、かえって彼の感情を傷つけてしまったのでないかと、サムラーは気付くのであった。「最高の悪徳でない悪徳に身を持ち崩していると思われるほど自尊心を傷つけられることはない」(Nothing seemed to hurt quite so much as being ravaged by a vice that was not a top vice.)<sup>39)</sup> のだから。サムラーの娘は、父親と多分相手の双方の気をひくため、インド系の科学者ラル博士から『月の未来』の講演原稿を持ち逃げし、グルーナー医師の娘アンゼラは、結婚するつもり恋人の目の前で行きずりの男と寝てみせる。その

弟のウオリスは低空をとびすぎてセスナ機を民家の煙突にぶつけてしまう。サムラーが同居させてもらっている姪のマーゴットは、好人物ではあるが、例えばハンナ・アレントの「愛の陳腐さ」という文句を分析したいと思うとサムラー相手に半日でも1日でも話が尽きることがない。シューラの前夫アイゼンは印刷工であったが、イスラエルからニューヨークに出てきて“芸術家”になった。「世界支配の高みまでよじ登っていく。芸術の神性によって。靈感をうけて人類に語りかけるのだ。」(rising and rising to heights of world mastery. By the divinity of art. Speaking, inspired, to mankind.)<sup>40)</sup>

サムラーを取り巻く者たちのなかで唯一人正気なのはグルーナー医師であった。「彼は自分の職業が——メスとか血が好きではなかった。彼は良心的だった。自分の義務を果たしてきた。」(He had disliked his trade—the knife, blood. He had been conscientious. He had done his duty.)<sup>41)</sup> そのような彼にサムラーは「人間的な顔」(a human face)<sup>42)</sup>を見る。「義務による苦痛は人を高潔にし、このような高潔さは決して無視できるものではない」(The pain of duty makes the creature upright, and this uprightness is no negligible thing)<sup>43)</sup>と感じるサムラーは、自からの限界内で義務を果たして生き、そして死んでいくグルーナーに、「エリヤが必要としていることを何かしてあげたい」(he had something that Elya needed)<sup>44)</sup>という気持ちに駆られて、サムラーは彼の息子ウオリスと娘のアンゼラにせめて普通の息子、普通の娘として父親をあの世におくってやれるようにと説得するが無駄だった。父親としての十二分な愛情にもかかわらず、エリアはウオリスを「知能指数の高いうすのろ」(a high-IQ moron)<sup>45)</sup>、アンゼラを「ふしだらな女」(a disty cunt)<sup>46)</sup>と呼ばざるを得なかったのである。結局、サムラーは一人グルーナーの亡き骸の前で、彼に話しかけ、神に祈る。

グルーナー以上にサムラーは人間としての限界を考え、且つそれを甘んじて受け入れてきているのである。自分を取り巻いている人々だけではなく地球上の一切の狂気は、人間が「個人であると同時に“完全”であること」(being

separate and “whole”)<sup>47)</sup> を願うところから派生しているのだと彼は考え、自身自身は「断片」(a fragment)<sup>48)</sup> であることに満足し喜びを見出しているのである。ウォリスに月に行きたくないかと尋ねられて、サムラーはそのような気が少しもないと答えて、更に次のようにつけ加える。

Besides, if I had my choice, I'd prefer the ocean bottom. In Dr. Piccard's bathysphere. I seem to be a depth man rather than a height man. I do not personally care for the illimitable. The ocean, however deep, has a top and bottom, whereas there is no sky ceiling.... I am content to sit here on the West Side, and watch, and admire these gorgeous Faustiandepartures for the other worlds.<sup>49)</sup> (それに、もし勝手に許されるなら、私は海底の方が良い。ピカール博士のバチスカーフに乗ってね。私は高所人間よりむしろ深所人間のように思う。個人的には無限なものは好きではない。大洋は如何に深くとも天井と底がある。空には天井がない…。別世界への華麗なファースト的な出発を、このウエストサイドに座って見守って、感嘆するだけで満足だ。)

そしてサムラーは「すべての地図製作者はミシシッピ河を同じ所に書き込み、独創は避けるべきである」(All mapmakers should place the Mississippi in the same location, and avoid originality.)<sup>50)</sup> ということをはっきりと分っている人間なのである。ここでわれわれは「いまのサムラー」と「かつてのサムラー」の断絶を明確にできるであろう。それは彼自身の用語を使えば「高所人間」と「深所人間」の違いであり、T.E. ヒューム流に言えば「ロマン主義」と「古典主義」の違いなのである。一線を画するのは人間の存在が有限かということの認識である。かつてのサムラーが「世界都市」や「進歩」、それにユートピアに熱中することができたのは、まぎれもなく人間の進歩、即ちその無限性を信じてきたからであり、これこそまさにロマン主義的な態度なのである。そしてパロディにされたハーゾグも、もちろんそうであった。『ハーゾグ』と『サムラー氏の惑星』は共に祈りでもって終っているが、その意味するところは根本的に異なっているのである。前者のは倫理的な、従って人間的な祈りであり、一方後者のは宗教的な、神をどうしても必要とする者の祈りであった。それ故、才気にまかせてそれらを並べてその類似を強調するのはナンセンスであり<sup>51)</sup>、サムラーを、「いまのサムラー」を「25歳年上のハーゾグ」と

見做すこともまたナンセンスなことである。

『宙ぶらりんの男』に始まるベロウの長篇小説の主人公たちがいつも己れに問いかけてきたのは「良き人間として人は如何に生きべきか」(How should a good man live?)<sup>52)</sup> ということであったが、われわれはこの『サムラー氏の惑星』にきて始めて地平から宗教的な高みに、あるいは深みにとび出した主人公を知ることになったのである。

注)

- 1) Tony Tanner, *City of Words* (London: Jonathan Cape, 1971), p. 309.
- 2) David Galloway, "Mr. Sammler's Planet; Bellow's Failure of Nerve" *Modern Fiction Studies*, Vol. 19, No. 1, p. 19.
- 3) Allen Guttman, *The Jewish Writer in America* (New York: Oxford University Press, 1971), p. 221.
- 4) Max F. Schulz, "Mr. Bellow's Perigee" *Contemporary American-Jewish Literature*, ed. Irving Malin (Bloomington: Indiana University Press, 1973), p. 127.
- 5) Saul Bellow, *Mr. Sammler's Planet* (New York: The Viking Press, 1970), p. 3.
- 6) *Ibid.*, p. 6.
- 7) *Ibid.*, p. 6.
- 8) *Ibid.*, p. 41.
- 9) *Ibid.*, p. 102.
- 10) J. N. Harris, "One Critical Approach to Mr. Sammler's Planet" *Twentieth Century Literature*, Vol. 18, No. 4, p. 342.
- 11) Bellow, *op. cit.*, p. 92.
- 12) *Ibid.*, p. 41.
- 13) *Ibid.*, p. 230.
- 14) Saul Bellow, *Herzog* (New York: The Viking Press, 1961), p. 136.
- 15) Bellow, *Mr. Sammler's Planet*, pp. 60-1.
- 16) *Ibid.*, p. 61.
- 17) Bellow, *Herzog*, p. 4.
- 18) Bellow, *Mr. Sammler's Planet*, p. 29.
- 19) *Ibid.*, p. 29.
- 20) Bellow, *Herzog*, p. 1.
- 21) *Ibid.*, p. 2.
- 22) Bellow, *Mr. Sammler's Planet*, p. 3.
- 23) *Ibid.*, p. 63.
- 24) *Ibid.*, p. 63.
- 25) *Ibid.*, p. 16.

- 26) Ibid., p. 19.
- 27) Ibid., p. 212.
- 28) Irving Howe, *The Critical Point on Literature and Culture* (New York: Horizon Press, 1973), p. 132.
- 29) *Times*, Feb. 9, 1970, p. 54.
- 30) Bellow, *Mr. Sammler's Planet*, p. 67.
- 31) Ibid., p. 118.
- 32) Ibid., p. 58.
- 33) Ibid., p. 64.
- 34) Ibid., pp. 32-33.
- 35) Ibid., p. 228.
- 36) Ibid., p. 229.
- 37) Ibid., p. 229.
- 38) Ibid., p. 63.
- 39) Ibid., p. 62.
- 40) Ibid., p. 168.
- 41) Ibid., p. 83.
- 42) Ibid., p. 257.
- 43) Ibid., p. 220.
- 44) Ibid., p. 260.
- 45) Ibid., p. 177.
- 46) Ibid., p. 177.
- 47) Ibid., p. 181.
- 48) Ibid., p. 182.
- 49) Ibid., p. 183-84.
- 50) Ibid., p. 228.
- 51) Galloway, "Mr. Sammler's Planet; Bellow's Failure of Nerve," p. 25.
- 52) Saul Bellow, *Dangling Man* (London: Penguin Books, 1963), p. 32.